小麦畑の中のビール

高田那美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小麦畑の中のビール

【Ｎコード】
Ｎ５６１６Ａ

【作者名】
高田那美

【あらすじ】
旅をする“僕”は喉を渇きを覚え、鞄の中のビールへと手を伸ばす。しかし同行者の“黒猫”がそれに怒り――

僕は周囲を見回し、何度目かもしれない溜息を吐いた。
三百六十度を埋め尽くすのは、腰の高さほどの金色の草。首を垂れるほどに実をつけた小麦が、地平線の遥か彼方まで続いており、その変化の少なさに吐き気を覚えた。人間は刺激を求める生物だ。だのに僕がここ一時間の間に受けた刺激といえば、小石だらけの道を歩くことによる足の裏への痛みだけ。視覚と聴覚は一切変わらず、触覚さえも最早感覚が無い。
気を紛らわせるために、足元に置いた鞄を開けビールの缶を探した。石鹸の包みを除け蝋燭の束を押しのけると、衝撃から守るためにシャツを巻き付けられた缶が現れた。シャツを解き、プルトップに指をかけたその瞬間、足元から鋭い声が上がった。
「すぐさまその指をどけろ！　さもないと引っ掻くぞ！」
視線を落とすと、毛を逆立て、しっぽをピンと立てた一匹のオス猫がいた。この旅の唯一の同行者が、僕を威嚇したのだ。
「やあ、おかえり。散歩はどうだった？」
わざとらしく呑気に答えた僕に対し、猫は姿勢を低くし――弱った小鳥を見つけ、その喉元に飛び掛るために全身のバネを一旦押し縮めるあの体勢をとった。
「散歩だと？」
皮肉な笑いを含んだ低い声で、猫は唸った。
「迷っちまった馬鹿な旅人のために正しい道を探すことを散歩だって言うんなら、そうだな、最高だったぜ。どこまで行っても小麦だけで道なんかありゃしねえ。おまけに地面にゃ小石がごろごろしてやがって、お陰で俺の肉球は大分頑丈になったぜ」
猫は器用にも小さく鼻を鳴らし、僕に飛び掛った。しかし疲労のために距離感が狂ったのか、一歩及ばず、足元のトランクに着地した。

「なのちお前ときたら！」
若干崩れてしまった体勢を立て直しながら、猫は喚いた。
「俺の健気さも知らん振りして、一人飲んだくれていやがる！」
「良く見てくれよ。まだ缶を開けてすらいないんだけどね」
あまりの喧しさに辟易しつつ、僕は猫に缶を振って見せた。たぷたぷと、缶の中で液体が音を立てた。
「どうだかな。もう何本か飲み干して、どっかに空き缶を隠してるのかもしれないだろうが」
缶が揺れるリズムに合わせて尻尾で地面を叩きながら、猫は何故か悲しげに呟いた。
僕は肩をすくめた。いくら猫相手とはいえ、ここまで疑われるといささか淋し過ぎる。
「なあ、信じてくれよ。僕はまだ本当に一滴も飲んじゃいないんだ」
けれども猫は、冷たく光る青い瞳を疑わしげに向けるだけだった。
もう僕に言えることはなかった。そんなに僕のことが信じられないなら信じなければ良い。たかが猫一匹の信用を失ったところで、どうってことはないのだから。
僕も猫も、それきり黙りこんでしまった。日は高く昇り、日陰が存在しない小麦畑の真ん中で、僕は汗をかき続けた。右手に持ったままのビールは、鞄に仕舞う事も、勿論飲むことも出来ず温くなっていった。

強い風が吹いた。周囲の黄金色がいっせいにざわめき、それまで続いていた沈黙を打ち破った。しかしそれも数秒で止み、すぐにまた静かになった。
しかし、再び訪れた静寂を、今度は猫が終わらせた。
「お前は疑問に思わないのか？」
「……何をだ？」
猫の言うことが理解できずに僕は聞き返した。猫は冷たい瞳で僕を見つめた。

不意に猫のことがとても怖くなった。青い瞳に絶えがたいほどの不快感を覚え、忘れていた吐き気が腹をゆすぶった。
脂汗が吹き出る。僕は両手で缶を握り締めた。口がからからに乾き、唾液の味から自分の舌の感触まで、全てが怖気立つほど気色悪かった。
「なんでお前がここに居るのか。なんで俺と話せるのか。なんで俺はお前に酒を飲ませたがらないのか。全部が全部不自然で現実では有り得ないことだけだ」
猫の声がひどく歪んで聞こえる。吐き気はますます強くなり、酸っぱい唾液が込み上げてくる。僕は指先が白くなるほど強く缶を握った。
何かを言おうとしたが、舌が痺れて声にならなかった。代わりに、無様なうめき声が葉の隙間から漏れ出た。
「お前は逃げ続けているんだ、頭の中でな。酒に溺れて逃げた先でもお前は酒に逃げようとする。辛い現実から逃げても、優しい妄想はゆっくりとお前を蝕む」
猫の声が、まるで大きな岩の中で響いているかのように、小さくか細く聞こえる。頭が割れるように痛い。吐き気は変わらず腹の中で暴れている。どうしようもなく喉が乾く。
堪えきれずに、僕はプルトップに指をかけた。
音を立てて、勢い良く炭酸ガスが缶から抜けていく。震える手で缶を口へと運んだ。
「止めろ！　飲むんじゃない」
猫の声に構わず、僕はビールを口の中へ注ぎ込んだ。ぬるい液体が弾けながら喉を落ちていく。口一杯に苦味と辛味が広がった。
僕は喉を鳴らしてビールを全て飲み干した。けれど、渇きは癒えず、吐き気も頭痛もおさまらなかった。
「お前は分からないのか？　逃げた先からまた逃げたら、結局は元居た場所に帰るということが」
猫の姿は消えていた。やるせない声だけが小麦畑の中で――否、

最早周囲は小麦畑ではなかった。ただの黄金色をした空間になっていた。急速に感覚が消えていく。地面に立っているはずなのに、虚ろな浮遊感が体を包んだ。立っているのか座っているのか判別することも出来なくなった。僕が僕という個人をちゃんと形成しているのかもあやふやだ。

しかし急に襲ってきた眠気が全てを覆い尽くしていく。吐き気も頭痛も収まらないが、そんなことはどうでもよくなった。景色が歪み、視界が狭まる。意識が、遠のいて、いく。

「――まあ、いいさ。どうせお前はすぐに戻ってくる。そして、違う形をした俺と――自分自身と出会うのさ」

意識、を手、放す直、前に聞こえた、のは、猫、と同、じ、僕の、声、だっ――

――そして、暗転。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5616a/

小麦畑の中のビール

2010年10月8日15時14分発行